’22

前期日程

小論文１

（共同教育学部　全専攻）

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は１冊（２頁），解答用紙は１枚，下書用紙は１枚です。落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで，以下の問に答えなさい。

分断ではない多様性を，どのように考えていけばよいのか。思い出すのは，マサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）の廊下で見た，あるチラシです。

チラシの左半分には学生らしき黒人女性二人が写っています。そしてその右側には，大きな文字でこう書かれていました。「Be your whole self.」それは，理工系の学生に向けて副専攻で人文社会系のコースを履修するように案内するチラシでした。

Be your whole self.「ありのままのあなたで」と訳したくなりますが，ややニュアンスが異なるでしょう。なるほどと思ったのは，「まるごとのあなた whole self」という表現でした。大学生で，遺伝子工学を専攻していて，アフリカ系アメリカ人で，南部出身で，女性で，演劇にも興味があって……例えばそんな複数の側面を持つあなたを，隠さず全部出していい。ニュートラルな「遺伝子工学の研究者」ではなく，アフリカ系アメリカ人として，あるいは女性として，遺伝子工学を研究することこそが強みなのだ。そう投げかける姿勢がこの「whole」には含まれているように感じました。

つまりそのチラシがうたっているのは，人と人のあいだにある多様性ではなくて，一人の人の中にある多様性なのでした。あるいはむしろ「無限性」と言ったほうがよいかもしれない。その「すべて」を，まずは自分が尊重しようというのが，そのチラシが伝えようとしているメッセージでした。

これだと思いました。それは，私が実際に障害のある人たちと接するなかで得た実感に，ピタリと合うものでした。

人と人の違いを指す「多様性」という言葉は，しばしばラベリングにつながります。あの人は，視覚障害者だからこういう配慮をしましょう。この人は，発達障害だからこういうケアをしましょう。もちろん適切な配慮やケアは必要ですが，まさに倫理ではなく道徳の領域で，個人が一般化された障害者のカテゴリーに組み込まれていく。いつもいつも同じ役割を演じさせられるのは，誰だって苦しいものです。

当たり前ですが，障害を持つ人はいつでも障害者なわけではありません。家に

帰ればふつうのお父さんや年頃の娘かもしれないし，自分の詳しい話題になれば，さっきまで介助してもらっていた人に対して先生になることもあるでしょう。ある先天的に全盲の男性などは，私の知る限り，収入面だけ考えても，三足の草鞋を履いています。本業はシステムエンジニアだけど，インターナショナルスクールで点字を教えていて（使用言語はもちろん英語），音楽活動でも収入を得ています。料理が得意で揚げ物もするし，若い頃はデートの前にどの道を歩こうか妄想を膨らませていました（ただし音的に）。

こうした一人の人が持つ多様性は，実際にその人と関わってみないと，見えてこないものです。一緒にご飯を食べたり，ゲームをしたり，映画を見に行ったりするふつうの人付き合いのなかで，「○○の障害者」という最初の印象が，しだいに相対化されてくる。フレーベルの恩物が，実際に手にとって回してみることによって初めて，立方体という見た目の形とは違う「円柱」という性質をあらわしたように，人も，関わりのなかでさまざまな顔を見せるものです。人と人のあいだの多様性を強調することは，むしろこうした一人の人のなかの無限の可能性を見えにくくしてしまう危険性を持っています。

このことは，裏を返せば，「目の前にいるこの人には，必ず自分には見えていない側面がある」という前提で人と接する必要があるということでしょう。それは配慮というよりむしろ敬意の問題です。この人は，いま自分に見えているのとは違う顔を持っているのかもしれない。この人は，変わるのかもしれない。変身するのかもしれない。いつでも「思っていたのと違うかもしれない」可能性を確保しておくことこそ，重要なのではないかと思います。

出典：伊藤亜紗（2020）『手の倫理』講談社選書メチエ，pp.48－50

問 1　人と人のあいだの多様性を筆者はどのように捉えているか，説明しなさい。（200字以内）

問 2　あなたの中にある多様性を，教育活動にどのように活かすことができるか。本文をふまえて考えを述べなさい。（400字以内）